



中
野
さん
と
僕





二〇〇九年九月十九日

羽田 一 札幌

二〇〇九年九月十九日

中野さんと僕と五泊六日

中野さん、という女の子と知り合ったのは本当に変なきっかけだった。

ソプラニーノリコーダーという笛がある。ソプラノより一回り小さな、低いファから高い高いレまで出る、ちょっとマイナーな存在。小学校で使うのはソプラノ、中学になってアルト。一般に縁があるのはその二つ。僕がソプラニーノリコーダーを知っているのは、笛マニアだからとか趣味がリコーダー演奏とか、そういうわけじゃない。結婚式の余興で、何故か友人四人でお祝いの歌を披露することになった。そういうのができる人間は自然と集まっていることが多い。一人がギターを弾くといい、一人は合唱で鍛えた喉を披露するといい、一人は南米かどっかの太鼓を叩くといった。

「おまえは？」

みんなの視線が僕に集まる。どうしてそんな目で僕を見る。世の中の人間すべてがステージに立って音楽を披露できるわけじゃないんだぞ。でも、彼らはその眼差しが含む傲慢さに気付いてはいない。いい、奴らなんだ。

「小学校でやった楽器……笛とか、鍵盤ハーモニカとか」

よし、それならお前はソプラニーノリコーダーを吹け、南米風アレンジした「乾杯」でもやろう、と誰かが言い出した。それ、お目出度いのか。僕の頭の中には、駅前にいるストリートミュージシャンが演奏する「コンドルは飛んでいく」の、哀愁切々とした響きが鳴っていた。

調べたところ、ソプラニーノリコーダーは大きな町の楽器店に行けば売っているという。普段乗らない路線の電車に乗って買い求めに行ったそれは、ガラスケースに陳列されてはいたが二千円かそこらの、懐かしいほどチープなプラスチック。アイボリーの吹口、焦げたブラウンのボディ。楽器店なんて何年も足を踏み入れていなかったから、そわそわとしてしまう。買い求めて、店を出たところで、後ろから呼び止められた。

「お客様！ あの、クライネソプラニーノをお求めではなかったですか!!!」

「いや、あの、大丈夫です、これで」

「ソプラニーノでよろしかったですか！」

はい、よろしいです。よろしいです。

ただでさえ知らない土地で、よくわからない物ばかり売っている店で、心がざらざらしている時にこの仕打ちは辛かった。やったことがないけど、万引きした時ってこんな気持ちなのだろうか。いやどうだろう。もっとゲーム感覚というか無自覚なような……。

話が脱線した。やっとの思いで手に入れたソプラニーノ。築二十五年のアパートでそっと息を吹き込んでみると、ふおおお、と音とも息ともつかぬ弱々しい音がした。これでは、ドかソかもわからない。もう少し息を強めると、もう空気を裂くような音だ。ぎよっとしてそれだけでもう吹く気持ちがどこかへ飛んでいってしまった。運指表、ガーゼをくくりつけて唾を拭くのに使う棒、それらと一緒に封印。こんな凶悪なもの家で鳴らせるはずがない。上下左右から苦情がきてしまう。仮に全く隣に音が漏れていなかったとしても、はっきりとした保証がない限り僕の心を強く乱して練習どころの騒ぎじゃない。

メールで笛係を押しつけた連中に相談してみると「公園か土手で吹け、ドナドナを吹け」「エアリコーダー」「スタジオ入り。意外に安いヨ」など、まことフリーダムな意見の中に「カラオケ屋で大丈夫」という人間性を感じる返事があった。僕は人間性の回復を賭けてカラオケ屋で練習することにした。

金曜の夕方、スーツ姿のまま駅前のカラオケ屋で「楽器の練習をしたい」と申し出ると、店員はこともなげに「うい」と短く音を発しただけで、僕を部屋へと導いた。問題ない、ということだろう。ソフトドリンクがくるまで楽譜をじっと睨み、彼が去ったのを確認してからおもむろにソプラニーノに息を吹き込んだ。ぴいよ。ぴい、ぷひゃー。アルトリコーダー以来のバロック式の運指。指ならしにメリーさんの羊など吹いてみる。十五年くらい吹いてなかったわりには、うまいと思う。子供の頃、ヤマハ音楽教室に通っていたおかげで、音楽の授業は得意だった。クラスで市の音楽コンクールに出たこともある。ランドセルを背負った帰り道はドラゴンクエストやファイナルファンタジーの曲を吹いては笑っていた。おお、僕は、できる。だんだん楽しくなってきた。楽譜を見つめてながら、ゆっくりと指の動きを覚えこむように吹き鳴らす。

僕の心もほぐれて興が乗ってきた時、不意に、誰かに覗かれている気がした。僕が顔を上げた瞬間、扉にはまったガラスの前から、人影がぱっと消えた。紺色の制服みたいだった。安普請の壁を突き刺すソプラニーノの音色が気に障ったのだろうか。リコーダーを吹く手を止めて、暗い目で窓を見つめていると紺色が戻ってきた。制服と体のバランスが奇妙にちぐはぐな、小さな女の子。長い髪の毛を高い位置で二つ結びにしている。年は中学生くらいだろうか。そっと窓からこちらを見る。当然、様子を伺う僕と目が合う。彼女は、みるみる頬を紅潮させた後、ぺこりと黙礼して廊下を走っていった。ぱたぱた、という音が聞こえそうな走りっぷりであった。

その中学生みたいな女の子が中野さんだった。

それから、どうやって僕と中野さんが知り合いメールをしたり本を貸したりするような間柄になったかは割愛する。あまり大事なことはないからだ。

ある日、中野さんからメールがきた。彼女のメールは顔文字がほとんどなく、絵文字が控えめに添えられている。内容は、僕が九月の連休（シルバーウィークというのだそう）に予定している、北海道旅行に同行したい、というものであった。確かに冗談混じりに、行ってみたい？と聞いたことはある。だけどそれは社交辞令のようなものであって、忙しい高校生の（彼女は驚いたことに高校生だった）彼女が五連休＋平日一日、計五泊六日もの間、北海道に来れるはずもないと思っていた。聞けば、ちょうど試験が終わって秋休みの時期で、二十四、二十五日はもともと学校が休みになるのだという。彼氏がないのは知っていた。けれど、部活動を熱心に行っている彼女が、貴重な休みを長たらしい旅行に費やすなんて。

今回、僕が企画している旅行は「北海道&東日本パス」という普通列車に限り五日間乗り放題になるフリーパスを使って、鈍行列車で好きなバンドの北海道ツアーを追っかけるというものだ。毎日何時間もローカル路線の列車に乗り、文章を書いたり、好きな音楽を聴いたり、知らない風景を見たり、そういう、うすらぼんやりとした旅。どこからどうみても若い女の子の喜ぶようなものではない。だけど、僕の話聞いた彼女は、「先輩みたい」とつぶやいた。

中野さんの先輩に、電車に乗って遠くの海で詩を書く、とても「素敵な」「あこがれの」人がいるんだそう。ベースがうまくて、ボーカルもこなせて、作詞も手がけて、美人で黒髪艶やかなしっかりもの。どんな完璧超人なんだ。もっとも彼女が語る「先輩」たちの話はどれもこれも面白く少し現実離れさえしていた。彼女がその先輩たち全員を、深く敬愛していることがよく伝わってくる。

そんな憧れの先輩みたいな経験、ひらたく言えば真似がしてみたい。あわよくば先輩にすごいね、って言われたい。でも一人でどこか行くのもまだこわい。そうした気持ちが僕と一緒にいきたいと言わせたようだった。

僕は最初断ろうと思った。

僕はグループ旅行というものが苦手だ。ふいに目に留まったささやかな、くだらないものをじっくり見たい。自分のペースで歩きたい。ご馳走を食べたいときもあれば、コンビニのパンで済ませたいときもある。知らない土地に刺激されて自分の心にたくさん言葉が溢れてくるときに誰かに話しかけられるのは苦痛だ。僕は、自分のエゴのために断ろうと思った。

彼女は、断ろうとする僕の表情を読んで必死にしゃべり続けた。ご迷惑はかけません、荷物も自分で全部持ちます、好き嫌いだって我慢します、云々。

前々から中野さんの持つ空気、気配に好感は持っていた。猫のような。密やかな。近いのに他人を嫌な気持ちにさせない。向かい合ってお茶を飲んでいて、僕がぼんやりとしゃべらずにいる

とき、一緒にぼんやりできる女の子。映画を見る時、隣の座席にいても気配のない女の子。でも、自分の世界に入ってしまうのではなくて、ちょっとだけこっちのことを気にかけてくれる女の子。可哀想なくらい必死な彼女の表情を見ているうちに、この子となら、旅を楽しむことはあっても、旅を損ねることはないだろう。そんな予感が身の内に湧いてきた。

「……いいよ」

「わ、嬉しいです!!」

僕は彼女にいくつかの条件を伝えた。ご両親に許可をとること。金銭や荷物に関して全部、自分のことは自分でやること。僕はたまに気ままにふるまうけど、中野さんもまた僕に遠慮しないこと。でも、好意まで遠慮しないこと。

彼女はそれらの言葉をひとつひとつメモにとり、わかりました！ と大きくなずいた。

昨日は最終の打ち合わせを兼ねて簡単な買い物をした。今日はこれから羽田空港で落ち合うことになっている。どんな、六日間になるのだろうか。

中野さんと乱気流

今日の飛行機は揺れるおそれがあるのだという。アナウンスが淡々と告げている。日本に近づいているという、台風14号の影響だろうか。離陸前の轟音の中で、中野さんがおそろおそろ僕の顔を見上げる。

「揺れるって、どんなふうなんでしょうか」

ここぞとばかりに、僕の飛行機初体験、観測史上第二位の強風が吹き荒れた仙台フライトの話をする、面白いくらい中野さんの顔色が変わっていく。着陸タイミングがとれず、機体は大きく傾いたまま仙台湾の上を何度も何度も回り続ける。ひどい二日酔いなのにトイレにもいけずエチケット袋を握りしめた僕、その揺れたるや。上下の浮遊感が実に胃の腑をえぐる厳しい波状攻撃。

「飛行機乗ったことないの？」

「家族で九州に行ったことはあります。あ、松山も。けど、そんなに酷く揺れたことなんて、一度も」

「どんな揺れだってお酒飲んでなきや大丈夫！ 本当にだめなら飛行機は飛ばないよ」

と、彼女の気持ちをおもいばかり励ましてあげたら「またそうやって適当なことばかりいって」とふくられてしまった。

人生でも好きな瞬間ベスト10に入る離陸が終わり、椅子を倒してもいいアナウンスが流れた頃に、中野さんが窓のほうを見ながら、ぼつぼつと話始めた。

話は主に彼女の父のことだった。一時はジャズミュージシャンを志したお父さん。それを職業にすることは叶わなかったが、今でもお父さんの生活は音楽を中心に回っているのだという。彼女は小学四年生の頃から本格的にギターを習っているそうで、推測するに英才教育を受けた相当の手練れのような。だけど、彼女は自身の演奏を「まだまだ」と謙遜していて、僕は一度も聴かせてもらったことがない。

彼女は言う。自分の演奏を聴いて「上手」とはみんな言ってくれる。だけど、「いい！」とは、まだ、言ってもらえない気がする。自分も父のように愛される演奏がしたい、と。

どうやらこの北海道行は例の海で作詞する先輩やら、初歩的なコードすら忘れしてしまうのに本番では、眩いばかりに魅力的な演奏をする先輩、素敵な素敵な先輩たち、に近づくための第一歩だけでなく、お父さんに近づくための第一歩でもあるようだった。

そうこう話していると、ぽーん！ という甲高いシートベルト着用のサインとともに、機体が小刻みにふるえだした。次第にふるえは大きく育ち、横に揺れ、縦にずっと浮遊感をともなって落ちる。前の座席の方から、きゃーという、妙にはしゃいだ子供の声が聞こえた。しかし揺れというほどの揺れではなく、これが揺れだというならボロいディーゼルバスの方がよっぽど揺れる。もっと揺れないかな、と思っていたらどうやら顔に出ていたらしく、中野さんにとっても渋い顔をされた。

「こわいの？」

「こどもじゃありません」

毛布を握り締めている小さな手を開かせて、僕はキャビンアテンダントのお姉さんに貰った飴をのせてあげた。

二〇〇九年九月十九日

中野さんとジェット風呂

ライブの後、会場のそばに今風の日帰り温泉があったので入っていくことにした。

湯浴み後、ロビーで涼みながら今日のライブのことを話しあう。

七拍子の不思議なリズム、古い石造りの倉庫を改装した箱の天然の音響、美しい模様の入ったギブソン、珍しい楽器、中野さんにはすべてがはじめてだろう曲の数々の紹介。逆に、彼女はプレイヤーらしい見地からあれこれと、僕の知らない知識を教えてくれた。

フルーツ牛乳を飲みながら彼女が一番印象深そうに話していたのは、観客と演奏者の距離のことだった。

今日の会場は本当にせまく、五十人が肩を寄せあい、最前列の人の鼻先にギター用のマイクがあるほどの近さだった。中野さんは、まだ学校の講堂でしかステージを経験したことがないんだそうで、あんなに間近で聴いてくれる人がいるってどんな気分だろう、と繰り返しつつやっていた。

温泉に備え付けられていた、ジェット風呂の話題になった時、僕が「肉が揺れるよね」と漏らしたところ、中野さんは真顔で「え？」と聞き返してきた。改めて彼女の上気した白い肌を見やる。一分の隙もない細い身体。こんなに小さな身体で、どんな風にギターを弾いているのだろう。三分十円の有料ドライヤーで五十円も使っちゃいました、高いです!! と髪を下ろした彼女は可愛らしくぼやいた。まだ湿気を帯びた長い黒髪が僕の目の前で揺れている。

明日、僕らは富良野へ向かう。



二〇〇九年九月二十日

札幌―富良野

中野さんと空知川

ライブ会場との直線距離で適当に選んだ宿はスキー場まで徒歩五分、富良野駅まで徒歩一時間という見事な立地だった。坂を登り、やっと思いで辿りついた宿に荷物を置いて、再び、山をだらりだらりと下って歩く。ふもとまで降りる直前で、空知川沿いの道へと折れる。途端に、歩道もある広い道から舗装されているかも定かでない、砂利だらけの道に化けた。右手には迫る山肌、左手には空知川。中野さんの表情も曇っている。

「私、こういうところ、あんまり歩いたことないです」

こういうところって？ と尋ねると、アスファルトに覆われていない、標識もない、道だという。

怖い？ と聞いてからかいたくなる。だけど、その度にふくれっ面になって口をきかなくなってしまうのは面倒くさい。ただ、道あってるよーと地図をふって見せた。

川向こうの国道からは、時折、車の行き交う音がする。あの気配の方向がはっきりしているうちは大丈夫。迷っていない。たとえば札幌のようにどこもかしこも碁盤の目、人の気配だらけのような土地のほうが僕の土地感覚は狂ってしまう。現に札幌はこっぴどく迷った。

彼女を不安がらせないように、無言できびきび歩く。少し彼女より先んじては写真を撮り、先に行った中野さんを追いかけてはまた撮り。

「どうして、そんなに写真、撮るんですか？」

どうしてだろうねえ。僕は記憶力が悪くて、好きなことでさえ覚えきれないから、誰か他人に気持ちを覚えていてほしいのかもしれないね。そんな、気恥ずかしい自分語りのするりと漏れる夕暮れ。こんな年下の女の子に、僕は、なにを言っているんだろう。

「記録じゃなくて、記憶ですか」

「そういう写真になるといいけど」

道が大きく曲がって、土手が見えてきた。山肌と別れて、一気に視界が広がる。陳腐な言い回しだけれど、空が広い。中野さんがわあ、綺麗な雲！ と声を上げた。さっきまで付きまとっていた不安も空に消えていったみたいだ。彼女に、コンビニで買った肉まんを渡す。さっき買ったばかりなのに、もう表面がぱりぱりと冷めている。後ろを振り返ると、山の稜線に日が見え隠れしていた。

「雲ってあんなに大きいんですけどっけねー」

「北海道はなんでもでかいからなー」

「雲もですか！」

「もちろん」

「ほかには？」

「道路」「あとは」「畑」「はい」「カニ」「……はい」「トウモロコシ」「えー」「……ごめんなさい」

ひとときわ背の高い山を雲が取り巻いている。構図があまりにも決まりすぎていた。よく山にかかる雲で季節がわかるなんていうけど、あの、一服の絵みたいな光景には、どんな意味があるのだろうか。

「肉まんの皮って冷めると甘くなるですね」

開けた土手を渡る川風が冷たい。遠くに目指す橋のアーチが見える。晴れか雨かは、わからない。だけど、今夜は冷え込みそうだ。

二〇〇九年九月二十日

中野さんと国道38号

ライブが終わり、三々五々、車が駐車場から出ていく中、僕と彼女だけが暗い夜道を歩きだした。行きに通った川沿いの道を覗いたら「げえっ！ げえっ！」と、正体不明の鳴き声が聞こえてくる上に、熊に鼻をつままれてもわからないほどの暗さだったので、遠回りして国道に行くことにした。

ほんの三時間前とは比べものにならない、本物の澄んだ冷気。北国で育った僕には懐かしい親しい何か。長袖を羽織った中野さんは一分間に一回くらいの頻度で「寒いです」を連発している。

「そんなに寒いんだったら……」

パーカーをさっと脱いだ途端、半袖一枚の肌が粟立った。最低気温四度の夜にこれは無理だ。黙ってまた着直すと、中野さんはあははと笑った。

橋を渡り、マクドナルドにケンタッキー、見慣れた看板の並ぶあたりをすぎると、国道といえども相当暗い。人はほとんど通らない。車道を通り過ぎる車の明かりだけが頼もしい。

歩き続けていると身体がだんだん暖まってきたようで、中野さんも少し元気になってきた。

へーへいへーへーえいへーえーえー、と、ワンコーラス口ずさんでみる。今日のライブで演奏された曲のコーラス部分。中野さんがきれいな声で続く。しっかりした音程。少し繰り返してから、僕は三度上で、いえーへいえーへーえいへーへーへー とハモる。

へー へいえーへー えいへーえーえー

いえーへーえーいえーへいえーえーえー

遠くにガソリンスタンドのうっすらとした明かり。澄んだ彼女の声と、僕のやけっぱちの声が重なる。

ほーにやーらーうたーげーのほーにやーにやー

歌詞全然覚えてないじゃないですか、と笑われる。

ほーにやーらーにやほにやああらーほーにやーほーにやほにやあらー へーえいえーへーえいえー
いえいえー。

僕らは国道と別れを告げ、陽気に坂道を登り始めた。



二〇〇九年九月二十一日

富良野―釧路

中野さんと雪虫

狩勝峠を越えてたどり着いた道東、釧路駅はうみねこがニャアニャアと鳴いていた。今朝、出てきた富良野駅が「北の国から」を流していたことを考えると、ずいぶんな違いだ。ホテルに荷物をたたき込み、僕らは釧路の街へと歩きだした。観光案内所で運命のように、あるチラシを見つけてしまったのだ。

それは墨絵のように美しい、ある一本の木の写真だった。その特徴的な画は、僕の好きな写真家の展示会が釧路で行われていることを示していた。

中野さんには宿で休んでいていいと言った。けれど、僕が考えていたより負けん気の強い彼女は「私だって、興味があります！」と果敢に言い放ち、かくして釧路の街を僕と歩いている。

知らないことを知りたい、なんでもいいから知らない何かをたくさん身のうちに蓄えて、己という大きな果実を甘く豊かに実らせたい。そんな衝動に彼女は付き動かされているようだった。彼女の会話から漏れる意識のレベルは、高校一年生としては恐ろしく高い。ギターだって相当上手なようだし、成績も悪くないようだ。だいたい、今、すごくなかったって、これから何かを始めても十分にすごくなれる年齢だっていうのに。彼女は何を急いでいるのだろうか。

「うわっっ!! なんですかこれ!!!」

暖かい日差しの町中を、雪虫が飛び交っていた。寒くなる前触れだという、白い、綿毛のようにはかない羽虫。

「雪虫だよ、知らないの？」

「し、しりません！」

僕の服に、彼女の髪に、一面に、雪虫がまとわりつく。中野さんは一生懸命腕を振り回して虫を追い払うが、後から後から、雪虫がまとわりついてくる。ぽん、と服をたたくと、死んだようにじっとしていた彼らが、一斉にわっと飛び立つ。彼女の頭をぽんぽん、と叩いてあげると、彼女の頭からも大慌てで飛び立っていく。

「みんなどこに行くんでしょう」

「きっと、寒くなる前に暖かく過ごせる場所を探しているんだよ」

雪虫を追い払った時に触れた彼女の髪は、ふんわりと温かかった。

「暖かい場所、ですか。……軽音部、みたいですね」

釧路の町は思っていたよりも海に近くて、僕らはいつの間にか港まで出ていた。目的の釧路芸術館は、少し通り過ぎて、後ろだ。

「私、はやく、すごい人間に、なりたいんです」

「そんな感じ、するよ」

わかりますか、と彼女は恥ずかしそうにうつむいた。ほら、入ろうよ、と僕は芸術館を指した

。

中野さんとコインランドリー

旅も三日目ともなれば、そろそろ洗っておきたいものもある。僕などは最初からそれを見越して荷物を少なく用意してきた。ランドリールームでぼんやり、ぐるぐる回る洗濯物を見つめっていると、中野さんがひよいと顔を出した。そのまま僕の隣のベンチに腰掛ける。

「.....すごいですよね」

中野さんがぼつりと、つい数時間前まで観ていたバンドの名前をあげた。

「あんなに小さなステージで、全身全霊を賭けるように、楽しそうに、高いところへ昇るように、演奏する人を初めてみました。いろんなライブ見てますけど。お客さんが少ないと、どうしても、どこか気持ちのノリが弱かったり、ふてくされた演奏をする人って、いるんですよ。そして、そういうのはどうしてもわかってしまう」

乾燥機の中でぐるぐる回る僕のシャツを目で追いながら、彼女はどこか冷めた笑みを浮かべた。ちょっとすれた彼女の表情に、僕はちよっぴり安心した。よくできた女の子の見本みたいな彼女にも、他人に対して少し冷たい目をする部分があるんだな、と。

「軽音部って」

彼女が所属するその部活は二年生の先輩たち四人と彼女、たった五人で構成されているそうだが、

彼女は言う。私の代は独りしかいない。再来年、自分が三年になった時、新たな入部者を得るためには、自分が、あのバンドの人のように、自分に加入を決意させた先輩たちのように、人を震わせるようなギターを弾かなくてはいけないのだ、と。

「私も.....先輩たちの演奏を聴いて、軽音部に入ったんです」

あんなに心も身体も預けて一生懸命になれる音楽、一緒にやってみたいと思わせる、温かく楽しい音楽を私もやりたい。

「もし、来年、誰も入部しなかったら私、ソロで弾き語りですね」

彼女は半ばそれを覚悟している風でもあった。どうやら軽音部にたくさん入部者の集まるよう

な学校ではないらしい。

「いいじゃない、歌ってギター弾いて、足には鈴巻いてさ、講堂を踏みならしなよ、ロックだよ!!」

鈴はちょっと……とはにかむ中野さんは、それでもどこか夢見るように楽しそうだった。明日、僕たちは網走に向かう。そこで、四日間追いつけたステージも、最後を迎える。



二〇〇九年九月二十二日

釧路―網走

二〇〇九年九月二十二日

中野さんと釧網本線

九時五分発の「快速しれとこ」は通路まで埋まった満員となった。僕らはこの列車に乗って釧路から網走を目指す。

「人でいっぱいですね」

「釧路湿原や知床に行くんだらうね」

旅行四日目、クロスシートの向かいの中野さんの目が少し重そうだ。僕も身体の表面に疲れが浮いている感じがする。曇り空。今日は二人とも、ぼんやりと窓の外を眺めている。キハ54のエンジン音。心地よい振動。ディーゼル車はこうでなくちゃ。

釧路を離れて湿原に差し掛かった頃、

「あ」

小さく中野さんが声をあげた。僕はさっとカメラを構え、クロスシートに同乗した人々も窓に視線を走らせる。

「カヌーです！」

中野さん以外の三人の間に、はっきりと「動物じゃないのかよ！」という意志の交流があった。

「カヌー……珍しい？」

「うん、乗ってみたいです、素敵です！」

彼女が女の子らしいうっとりとした表情を見せる。たしか、塘路駅界限で湿原のカヌー体験ができるガイドで読んだ。僕が、こんな、鈍行だけで北海道を巡る旅なんかにしなければ。北海道ツアーの追っかけをする、なんて思わなければ。

「ごめん、ね。中野さん。僕がこんな旅の行程を組んだから。特急を使うとか……ライブの数を減らすとかすれば、もっと、北海道らしい、観光とか、たくさんできたのに……」

「そういう旅行だって、私がついてくる前から、決まっていたはずですよ？」

それはそうだけど。でも、中野さんが来るなら、僕はもっと柔軟に旅程を変えるべきだったんじゃないのか。

「夜のピクニック、少しは読みました？」

「あんまり進んでない」

今回、列車で退屈した用にお互いに本を貸し合っていた。この旅行で読んでほしい本。僕からは内田百閒の「阿房列車」を、彼女からは恩田陸の「夜のピクニック」

「ネタバレじゃあないんで言いますけど。あの本にはこういう台詞があるんです」

『みんなで夜歩く。ただそれだけのことがどうしてこんなに特別なんだろうね』

私にとって、この旅行がまさしくそうでした、と彼女が言う。

「初日から時間ぎりぎりまで道に迷った札幌の苗穂、暗い道続きでほんとは怖かった富良野、昨日の釧路は目の前にお店があるのに最後まで気がつかなくてぐるぐる迷って。毎日不安でした。けれど」

音楽を求めて、知らない街を歩く。こんな特別なこと、歩行祭でだって、ないです。

だから、どんな観光地より思い出深くて、大切な体験なんです。

彼女の一生懸命な言葉を聞いているうちに、不意に、じわりと涙が湧いてきた。慌てて横を向く。

ガタゴトと快調に列車は走る。窓の外の湿原がゆるゆる流れていく。

「それなら、良いけどさ」

「でも、今日で、おしまい、ですけどね」

ああ、そうだ。今日でライブはおしまい、千秋楽だ。おしまい、という言葉がひたひたと胸を打つ。一旦は引込んだ涙が、また顔を覗かせる。

「あ、バンビです！」

「鹿だろ！」

かみ殺し切れない、同乗の旅人たちの笑い声が、今はありがたかった。

中野さんと談話室にて

その年季の入った民宿は、別館にライダーハウスがあり、談話室は旅慣れた人たちのさざめきで満ちていた。僕と中野さんも、その隅っこに陣取って、インスタントコーヒーをすすりながら、今日の興奮を分かち合っていた。まだ胸の奥に、ギターの、鈴の、ハープの音が鳴り響いている。

「今日が一番コンディション悪そうでしたね」

「声の高いところがすごく不安定でね」

「でも、今日が一番良かったですよ！」

「今日が一番よかったよね!!」

毎日列車に乗って、ライブを見て、また次の街へ向かって、の僕らでさえ、四日目ともなれば随分くたびれている。

それを、あのバンドの人たちは、毎日歌い、楽器を弾き、翌日ともなればまた車を走らせて次の会場へ向かう。その労苦は僕らの想像の及ぶところではない。

「父が言うには、ワンマンで二十曲もやれば、一回のライブでも体重が数キロ落ちるそうです」

その論法で言えば、彼らは十キロ近く体重が落ちても不思議ではない。

ライブがはじまった時は音が不安定に揺れていた。それを吹き飛ばすように、楽器が響き、床を踏み鳴らされる。身体を燃やしていくように、声が伸びていく。僕ら観客もそれに応えるように、手を打ち、最後のアンコールは求めに応じて歌った。僕はあまり、コンサートやライブの類で一緒に歌う、という行為が好きではない。だけど、今日ばかりは素直に歌うことができた。

「中野さんもすごいよね、知らない曲なのに歌ってた」

「えっと、歌詞は母音で歌って誤魔化してましたが、音は出だしの音を聴いてなんとなくで合わせてるんです。少し遅れますけど、だいたいなんとか」

「ごめん、言ってる意味がよくわからない」

理屈はよくわからないけれど、なんか彼女が合わせる技術を持ってるってとこだけわかった。

「途中から時間が止まればいいのに、ってずっと思ってた」

「音楽は、いつか終わるから、音楽なんですよ」

これも父の受け売りなんですけどね、と彼女は恥ずかしそうに笑う。

四日間、毎日聴ける！　と思ったライブも今日で終わってしまった。夢のような日々だった。明日は最後の宿泊、明後日は東京に帰る。

僕らのそばにいたライダーらしき人たちが、どっと笑い声をあげた。、これなら明日は晴れるな！　と口々に嬉しそうに言う。

「ほら、明日、晴れるですよ！」

そうだよお嬢さん、明日は晴れるよ、ところでどこから来たの？　えっと、東京からです！

そっかそっか!!　中野さんはあつと言う間に、彼らの輪の中に溶け込んでしまって、ただ、僕だけがぽつんと取り残された。

明日、僕たちは、旅の終着点と定めたところへ向かう。



二〇〇九年九月二十三日
網走

中野さんとサンゴ草

「センスないですっ!!」

よく晴れた観光日和だというのに、中野さんが怒っていた。彼女を怒らせているのは売店のスピーカーから大音量で流れている「サンゴ草咲く日にほにゃほにゃ〜」という、ご当地歌謡曲だ。

「なんで同じ曲をエンドレスですかループですかっ!!」

曲の善し悪し以前に、ずっと同じ曲が延々かかっていることが中野さんの逆鱗に触れている模様。スーパーの魚売場とか、焼き肉のたれ売場とか.....などなど、彼女が語りはじめてしまったので、僕はまあまあとだめながら、彼女を人の少ない方へと引っ張っていくことにした。

土がむき出しの道路を行くと、次第にスピーカーの音も聞こえなくなり、落ち着いた朱色のサンゴ草を楽しめるようになってきた。

「そもそも、どんなに楽曲が素晴らしかったとしてもですね.....」

まだ語る気満々の彼女に、売店で買いたいももちを差し出す。

「あの売店で買ったんですよね？」

「揚げたてだからおいしいよ」

「もふ.....音楽の浪費というのは.....もふ.....もふもふ」

おお王蟲の赤い目が青く戻っていく。さすがは揚げたての力。

サンゴ草はまだ真っ赤に染まるというほどではなく、灰色みの強い部分、朱に染まり始めたあたり、赤いあたり、と場所によってムラが激しい。その光景を、僕はぱちりぱちりとカメラに収めていく。

「あれ、カメラで見ると真っ赤ですね」

中野さんがひょいとカメラの液晶ビューをのぞき込んだ。

「ああうん、カメラの設定をいじってね、本当はこんな光景も見なかったなーっていう風に撮ってみたんだ」

「へえ……随分、色が変わってしまうんですね」

「もちろん、目で見たのに近い方も撮ってみたよ」

再生モードで少し戻して、灰色と朱のむらのある絨毯を液晶の中に呼び戻してみせる。

「あ、こっちは確かに見た感じに似てます」

できたら、こっちを残しておいてほしいです、と中野さんは小さくつぶやいた。

「どうして」

灰色の眺めは確かに、見た目が悪いかもしれないですけど、私たちが見たのは確かにこれですし、その時の、微妙に感じた気持ちとか、まだ早かったかな！ みたいな、残念さも、残しておきたいじゃないですか。

たしかに、それが旅行、というものかもしれないね。

土の道をまっすぐ進むと、やがて、オホーツク海に突き当たった。おだやかに波が寄せては返し、綺麗な模様を浜辺に残す。

空には時折、があがあとやかましい鳴き声を交わす鳥の群が現れ、皆、過たず西を目指して飛んでいく。

「あんなにたくさん飛んでいるのに、みんな間違いなく西へ行きますね」

「渡り鳥方角を理解して、迷わずに渡って行く力や、何百キロも離れていても犬が家に帰る力を、Psi-Trailingって言うそうだよ」

物知りですね！ と目を輝かす彼女に、ネタばらしを兼ねて曲を口ずさむと、「ああ、釧路の時の」と、中野さんは素早く記憶を呼び戻している。

「みんな、どこへ行くんでしょうね。家に帰るのかな」

「渡り鳥だったら、どこが家ってこともないんじゃないか。きっと一生、旅の途中、だよ」

たびの一、とちゅう一、で一。

また小さく歌ってみせる。

ずっとこの旅が続けばいいのに。ずっと、旅の途中ならいいのに。だけど、次に行くところで終着点だ。僕がそう決めたのだ。

中野さんと能取岬

中野さんがこの旅に来ることになる前から、旅の最後には、どこか果てのような、これ以上、どこにも行き場がないような、ところに行きたいと思っていた。それで選んだのが能取岬だ。

宿の人が言うには、レンタルの自転車で三十分も走ればたどり着けるといふ。自転車を借りて走り始める。最初は爽快な下り坂。最初が爽快であればあるだけ、帰りの不安が頭をよぎる。だが、これで行くしかない。僕と中野さんは、慣れない自転車のペダルを踏み込んだ。

約七キロの道のりは、たしかに三十分でたどり着いた。

僕らは荒い息をぜえはあとはきながら、駐車場の片隅に自転車を停めた。想像以上にアップダウンのあるコース。辛くなかった、と言えは嘘になる。ただ二人でいるがゆえの、妙な見栄がお互いの間にある。

岬と呼ぶには、ずいぶん広々とした場所だった。びゅうびゅうと風を切って自転車で下っていた時には聞こえなかった、潮騒の音がひっきりなしに聞こえる。自転車のそれとはまた違ったように風が強い。青い空、青い海。その境界線は白くくっきりと隔たれ、けして交わることがないように見えた。まるで僕と中野さんのように。

青い草を踏んで、柵沿いに岬の先端らしい地点を目指す。

「筋肉痛、なりますかね」

「なるとしたら、僕は明後日かな」

明後日。自分で口に出した言葉に、ぎよっとした。

昨日、ツアーが終わった。

今日、最後の宿泊。

明日、北海道を去る。

明後日、はもう、僕は東京で働いているはずだ。

柔らかな青草の感触が急に心許なくなってきた。ぎゅ、ぎゅ、と一步一步を踏みしめるように先を目指して歩く。やがて、僕が思い描いていたような崖と波頭が見えてきた。

「おお.....火曜サスペンス劇場みたいだ」

「土曜ワイド劇場のようでもあります」

「今、船越英一郎が出てきたら、僕は罪を白状するね」

「何の罪ですか」

僕の罪。そんなの、言うまでもない。中野さんだってもう、わかっていることだ。それでも僕らは共犯者ではない。罪を背負うのは僕だけにしかできない。なぜなら……。

「中野さん探偵には、話せないな」

「片平なぎさじゃなきゃダメですか！」

「あははは、ダメだね！」

笑いの中に、どこかしら混じる陰り。

遠くにモニュメントが見えてきた。岬にありがちな碑のたぐいだろうと思い、歩を進めて行くと、次第に大きくなっていくそれは……。

「頭上のは、鮭、ですかね」

「鱒、ではなさそうだね」

「オホーツクの塔」と名付けられたそのモニュメントは高さおおよそ十メートル、そこに巨大な漁師と、鮭、がどんと配置されていた。実に力強い。

「ここが……旅の、終着点だよ」

「おしまい、ですか」

明日も羽田空港まで旅程は続く、だけど旅の目的地はここでおしまい。

僕たちは口も聞かず、寄せては返す白い波頭をじっと見つめていた。

もう、なにも、言うべきことなんかないような気がする。

「そうだ」

僕は鞆からMP3プレイヤーを取り出した。

「ここに着いたら、聴こうと思ってた曲があるんだ」

「私にも半分、貰ってもいいですか」

僕はイヤホンの長いほうをハンカチで拭いて、中野さんに手渡した。彼女が耳に差し込んだのを確認してから、曲をスタートさせる。実は、どれをここで聴こうか思い悩んで、シャッフルの設定のままにしてあった。

「あ、この曲、あのライブの時に……」

彼女の鼻歌が、風に千切れて飛んでいった。
あとは、かえりみち。



二〇〇九年九月二十四日

女満別 | 羽田

中野さんと天都山

地元の人の言うことは、やっぱり完全にアテにはしていけなかった。

「天都山行きのバスに乗って、山の一番上にあるのが北方民族博物館、すぐ下がオホーツク流水館、さらに下に網走監獄があるよ」

「北方民族博物館から、網走監獄まで歩けますか」

「ほら、バスの時刻表を見るとそれぞれ数分ずつしか離れてないでしょ」

バスの時刻表には

北方民族博物館 九時四十五分

オホーツク流水館 九時四十七分

博物館網走監獄 九時五十一分

と、確かに記されている。二分と四分。ふむ。

僕らは、ここでちょっと待てよ、と気づくべきだったのだ。北海道六日目にして、未だに東京感覚が抜けきっていなかった。最初の、北方民族博物館とオホーツク流水館の間は、たしかに徒歩七分でたどり着いたのだ。だが、十五分以上歩いた今、ちっとも先が見えてくる気配がない。いったいどれくらい、離れているのだろう。

車だけが脇をびゅんびゅんと通り過ぎる。思えばこの旅で、車だけはやたらと脇を通っていくけれど、歩いている人をろくろく見なかった気がする。

ただ幸いなのは、道がずっと下りだということだ。歩道がないので縦に連なって歩き続ける。一步、一歩行くごとに、東京へ近づいているようで、僕は、何度も立ち止まった。カメラがあつてよかった、と思う。「白樺を撮りたい」とか「ほら、変わった標識」とか、いくらでも言い訳ができるのだ。

歩き続けると、カーブの手前で真下から、かすかに曲のようなものが聞こえた

「あれ.....監獄かな」

「施設っぽいものもちらっと見えましたね」

その、真下へ向かう林道があつた。明らかに地元の人、わかっている人専用、観光客が踏み込んだらとんでもないことになりかねない、小さな道。僕は、その道に入りたくてしょうがなかった。遭難してしまえば、帰らなくていい。そんな考えすら頭に浮かんだ。

だけど、僕らは大きなカーブを曲がって、道路沿いのたしかな道を選んだ。今日、僕らは、僕は、東京へ帰る。今日を、明日や明後日に延ばしたところで。空と海がけして交わらないように、僕と中野さんを分けへだつものが変わるわけじゃあないんだ。わかってる。

「今日、飛行機に乗って帰るって、信じられません！」

僕だって信じられないし、信じたくない。この澄んだ大気を捨てて東京へ帰るなんて。中野さん、君との旅が終わるなんて。

「だけれど、帰らなくちゃ旅は旅になれない」

僕の口から出た言葉は気持ちとは全く違うものだった。

「家に帰るまでが、遠足、ですねー」

「そうだよ、中野さん。僕たちは、帰るんだ」

「お土産、何にしようかなあ」

ああ、彼女には待っている人がいる。今日で帰してあげなきゃ。

「網走監獄グッズとかどうだろう」

「あ、すっごく喜びそうな先輩がいます」

あと数時間後には女満別空港を発つ飛行機の中だ。それが現実だ。

中野さんとお別れ

時折僕は思う。飛行機というものが、もっと遅く進めばいいのにと。ライト兄弟のころのように、ゆっくり、ゆったりと飛んでくれれば。中野さんは午後の日差しを受けた、きらきら光る雲海に目を細めている。

「きれいですね」

「そうだね」

それ以上の会話が、僕らの間で続かない。やがて、それさえも途絶えた。

羽田空港の端っこに飛行機が停まった。

リムジンバス、という名前だけ豪勢なオレンジ色のバスにぎゅうぎゅう詰めになれ、「出たら戻れませんよ」と書いてあるゲートを過ぎて、荷物を受け取るベルトコンベヤの前で二人、うすらぼんやりと通り過ぎる色々の荷物を眺めていた。中野さんはお父さんから借りたという、年季の入った青のキャリーケース。僕の黒いバッグ。

どんなに惚けていても、五泊六日の旅の相方はすぐに気づく。身体の方が勝手に動いて、えいや、よいしょ、と引きずりおろす。到着ゲートをくぐって出れば、もう、そこは見慣れた羽田空港だ。

もう、言葉も出なかった。僕はまたバスに乗る。彼女は地下へ潜ってディーゼルじゃなくて電車に乗って、彼女の住まう世界へ帰る。わかっている。知っている。

僕らは紫のベンチに並んで腰かけて、しばらく動くこともできなかった。何か一言あれば立ち上がれるのに。笑顔でバイバイ、と手を振って、二個組のアイスみたいにぱっきり別れられるのに。

何か言わなければ、僕らは別れられない。僕から言わなきゃ。お別れだ、そう伝えなきゃ。それが僕の最後の役目だ。

意を決して息を吸い込んで横を見た時。もう、彼女の姿はなかった。

青のキャリーバッグも、揺れる二つに結んだ黒髪も、くるくると万華鏡のように変わる表情も、桜色のリップを塗った唇も。まるで最初からそこにいなかったかのように。

僕がお別れだと思った瞬間に、彼女は猫のようにするりと行ってしまった。

僕は地下へ向かうエスカレータに、小さく手を振った。

ありがとう、中野さん。君と過ごした六日間は、君と見た北海道の空は、君と聴いた音楽は、たとえ忘れてしまったとしても、僕の身体の深いところに確かにあって、消えることはない。

僕は、僕の荷物を持って、ようやく立ち上がった。



過
日

今日の夢のこと

まだ、僕は、女満別から飛んで帰ってきたのが昨日のできごとのような気がしている。一昨日はまだライブのことが忘れられず、仕事の納品を一つとぼした。昨晩は、ひどい下痢と嘔吐を繰り返して、まるで、僕の身体が東京に在ることを激しく拒んでいるようだった。

空が、ない。

泣きたいくらい、ここには空が見えない。智恵子じゃなくたって何度でも言ってやる。この街には空がない。空がない、空がない、空がない。ああ。

君の、夢を見た。

中野さん。君の夢を見た。

君は、エレキギターを抱いて歌っていた。真っ赤なフェンダー・ムスタング。まだ身体に余る紺の制服を着て、学校の音楽室みたいなところで、黒板の前で、少し照れながら歌っていた。

どこかで聞いたことのあるバラード。

君は、それをぎゅっぎゅっと、パンチの効いたロックアレンジに変えていた。澄んだ声が紡ぐメロディ。

ビートルズ、うん、イエスタデイ。

いつの間にか目が覚めていた。

頬に手をやると濡れていた。血みたいにぬるりと、濡れていた。

中野さん、僕は、君の夢を見たんだ。

夢を見る方法

久しぶりにポメラを開いた。電源はつかない。最後に開いたのはいつのことだったろうか。ポメラは、有り体にいつてしまえば、旧式のワープロを手のひらサイズに納めた、どこでも気に入りのキーボードがないとイヤでたまらないテキストフリークのための、愛らしい機械のことだ。ポメラは単四電池二本で動く。背面のロックをはずして、古い単四電池をはずし、新しい電池を二本滑り込ませる。儀式のように慣れた僕の手つき。

そうして、真新しい動力を得たポメラは、その小さな液晶の中に薄墨のような文字を映し出した。自動的に、最後に編集していたファイルが立ち上がる。

その、書きかけのテキストは.....やっぱり、君のことについて書いたものだった。

中野さん。去年、北海道からの帰り道、羽田空港で別れてから会っていない。

君は、今、どうしているの。相変わらず、真っ赤なエレキギターを弾いているの。その綺麗な声で、誰かの後ろでそっと歌っているの。

ねえ。どうしている、中野さん。

もう一度、僕の隣に立って、同じ空を見上げる日はくるの。

あの日々が夢だったというのなら、どんな風に眠ればいいんだろう。眠り方すら、忘れてしまった気がする。

中野さん、君は眠っている？ 起きている？ 夢は見ている？

ひとりぼっちのセロ弾き

僕には友達がいなかった。

今だって友達が多いわけじゃないけれど、子供の頃は掛け値なしに友達がいなかった。引っ越し先の住宅地は造成されたばかりで、僕と釣り合いのとれそうな子供は、まだ一人もいなかった。

本来なら幼稚園に通う年だったのだが、肺炎と小児喘息を一度に患った僕は、新築の家の中で、一日中、布団の中でただぼんやりと苦しんでいた。喉が腫れ上がっていて、食べられるものは薬とお粥とヨーグルトだけ。

楽しみはテレビのアニメや特撮、そして大学病院で月に一度買って貰える子供向け雑誌（アニメや特撮番組の特集ばかり載ってるあれだ）だった。僕が愛読していたのは、「てれびくん」というカラフルな雑誌。この手の雑誌で古今変わらないものに豪華付録というものがある。特撮ロボットのペーパークラフト、キラキラ光るシール。何より僕が執着したのは「すごろく」だった。

単純な、ただのすごろくではない。人生ゲームやモノポリーのように紙のお金をチップとして使うもので、僕には神の発明のように画期的な存在に思えた。誌面の完成図はまばゆく魅力的で、この上ないほど興奮したものだ。

有り余る時間を使って、アニメのキャラクターが印刷された紙のお金を一枚一枚ていねいに切り取り、厚紙のコマもすべて折って組み立てて、さて、準備万端整え、僕は母とすごろくを始めた。

だけど、あんなに胸ときめかせて始めたすごろくなのに、何か物足りない。だってそうだ、百万円横取りチャンスのコマに止まったところで、誰から百万円をとろうかな、なんて考える必要はない。母だ。僕が僕自身から百万円を奪って得る、というむなしい遊びをするのでなければ、母から奪うしかない。ゲームの帰結だってそうだ。僕が一位で母が二位。そうでなけりゃ、母が一位で僕が二位。これ以外、あり得ない。この、色とりどりのコマは何のためにあるのだろう。

もう一度雑誌を読みなおして、大切なことに気がついた。雑誌の中では、四人か、五人くらいの子供がたくさん集まってすごろくをやっているのだ。

そうだ、世の中にはたくさん人間がいるんだ。アンドロメロスだってメロスのほかにウルフとマルスとフロルがいる。戦隊物だって、必ず三人とか五人で戦っている。だけど、僕と一緒に何かをしてくれる人間はどこにいるんだろう。父は単身赴任に出てしまったばかりで、僕の世界において他者といえば、母、ただ一人しかいなかった。

母が家事をはじめてしまったので、僕は、一人で茶の間に残り、すごろくを続けた。今度は四つのコマを一度にふりだしに置く。赤の人。三が出た。三つ進む。道路に落ちていた財布を届けて五万円もらう。青の人。六が出た。一気に大きな数字。でも、進んだ先は残念、一回休み。黄色の人、二が出た。何もないコマ。緑の人も三が出た。赤の人と一緒に並んだね.....。

ようやく、おぼろげに、すごろくがどういうものかわかってきた。だけど、やっぱり赤の人が誰から百万円をとろうか悩んだところで、僕は赤であり青であり黄であり緑であり、誰が一位になったところで、やっぱり、それはすべて僕なのだ。

僕じゃない誰か。僕じゃない誰か。

赤のコマをそっと進める。この赤は、僕じゃないとしたら、どうだろう。。この赤のコマの人は.....赤い色の好きな、僕とは違う子供だ。そう、胸の中で言い聞かせてみる。僕は青が好きだ。だけど、この子は赤が好きなんだ。僕と違う子供。僕の、友達。そうだ、この子は僕の友達だ！僕によく似た、でも違うところもある友達。そうだ、友達なんだから名前があるはずだ。うん、君はあかだ。一緒に遊ぼう。

それからコマを手に取り、僕は様々な人間を、四歳児の思いつく限りの人間を思い描いた。男の子。女の子。おじさん、おばさん、おじいさん、おばあさん.....。一人一人に名前をつける。たくさん友達ができた。さあ、一緒にすごろくをやろう。

すごろくの盤面に向かう。僕はお気に入りの青のコマをとる。残りのコマは三個だ。僕と一緒に遊ぶのは誰？あかは僕のお気に入りだから、いつも一緒に遊ぶ。あかのコマはもちろん赤。誰が黄色のコマを選ぶ？緑は誰？よし、今日は僕、あか、よん、おじいさん、で遊ぼう。

最初にじゃんけんで順番を決めよう。決まったらサイコロを振る。僕が振って、おじいさんが振って、あかが振って、よんが振って.....。あ、よんが、あかから横取り百万円だ。よし、僕は三十万円を誰かに渡すコマに止まった。よし、あかを助けてあげよう。楽しいね。友達みんなですごろく、楽しいね。

僕は一日中、あかと過ごした。お気に入りの絵本を読む。お店や町の様子が描かれていて、それぞれ全部に名前が説明されている本だ。ほら、あか、これが、すべりだい。ぶらんこ。シーソー。僕はひらがなもカタカナも読めるよ、漢字も少し読める。絵の中の子供たちはみんな楽しそうに、駆け回っている。いつか、実物に乗れる日が来るのかなあ。ねえ、あか。

ある日、母が遊んでくれるという。僕は迷わずすごろくを選んだ。今日は僕と、おかあさんと、あかと、三人で遊ぼう。三つコマを取り出す。赤はあかの、青は僕の、おかあさんは、緑か黄

色ね。好きなを選んで。赤はだめだよ、あかが使うんだから。赤はあかのお気に入りなんだよ。だから、あかっていうんだ。

サイコロを振るよ。まずは僕。一、二、三。次はおかあさん。四がでたね。はい、じゃあ次はあか。サイコロを振るよ……二だ。じゃあ、次は……違うよ、おかあさんの番じゃないよ、次は僕だよ。え、さっき振ったでしょうって？ 違うよ、さっき振ったのはあかだよ、僕じゃないよ、今度が僕の番なんだよ!!

「ぜんぶ、あなたでしょう」

「そんな子、どこにいるの」

僕はおかあさんに一生懸命説明した。僕は青が好き、あかは赤が好き、あかはよんにいじめられるけど、僕はいつだってあかをたすけるし、あかにいろんなことを教えてあげる。あかは僕のそばにいてくれる、あかだけじゃない、よんも、おじいさんも、みんな、みんな、いるよ！ 僕の友達なんだ!!

「あなた、一人しかいないのよ」

そう言った時の、微妙に揺らいだ母の表情。

本当は知っていた。

僕がさいころを振って、はい、次は赤のあかの番だよ、と手渡したって、僕の右手から左手にサイコロが移っただけだってこと。あかがよんにいじめられるのは、僕がそう決めたから。順番決めじゃんけんだって、左手があかで、右手が僕ね、って決めてるんだ、

そんなの、そんなの、わかってる。

でも僕は、一人なんだ。友達なんか一人もいないんだ!! だから、だから!! 否定しないで！ 僕の友達を、否定しないで!!

溢れるばかりの感情を言葉にする術は、なかった。だから僕は、わあわあと泣いた。友達も欲しかったけど、僕の世界で、ただ一人、本物の人間である母に去られるわけにはいかなかった。

僕は、二度と友達のことを口に出さないように生きるほうを選んだ。やがて、僕の周りから、

あかも、よんも、おじいさんも、みんな、みんないなくなった。

その代わりに、母が買い与えてくれた玩具で遊ぶようになった。戦隊ヒーローや、ウルトラマン、仮面ライダーの似姿。

いくぞスカイライダーキック！ 80のへそビーム!! がきーん！ がきん、がきーん！ 80とデンジレッドは仲良しだ。スカイライダーは、強いけどいじわる。

目に見える形を持つ彼らなら、母も「いない」とは言わなかった。

僕には友達を持つことは許されない。僕は、マンガやアニメを見るように、誰かと誰かが、笑ったり、戦ったり、やっているのを見ていることしかできないんだ。

ずっと、そう思っていた。



二〇一〇年五月一日

青山 | 新宿

二〇一〇年五月一日

悲しい夢なんか見ない

うん、幼稚園の頃はすごく病弱でね。今でもあまり丈夫なほうじゃない。でも、成長していくにつれて、学校も通えるようになったし、中学では体育会系の部活にも入った。剣道部だよ。意外？ 少ないながらも、人間の友達もできた。一緒にアニメ見たり、漫画を読んだりするような友達。

そうして、どんどん大人になって、今はもう成長から衰退への曲線に差し掛かってるわけだ。え？ いやあ、ほんと、色んなものが衰えちゃったよ。これからもっと老いるんだろうけど。まだ、君にはわからないかな。

でも、僕は、あかのことを忘れたことはなかった。はじめての友達のことを。

そして、君のことも。

わかってる。四歳の頃から、ずっとわかっている。

僕の愛しい木霊。頭の中の壁に思いをぶつけては受け取って、またその壁に投げつけて。永遠のひとりキャッチボール。

今は、毎日が忙しい。求めなくても、手を伸ばせばすぐ隣の席に同僚がいる。呼ばなくても電話がかかってくる、メールが押し寄せてくる。君に、会いたいと思う心がつぶれてしまう。

中野さん、君に会いたい、会いたい、会いたい、知ってるよ、君はついに学外のライブに出たんだろ。バックステージパス、誇らしげだね。部室ですっぽんを飼ってるんだってね、アニメ版の話だけどさ。コミックスでは、さわちゃん先生が何か買ってくれるっていう話、ないものね。

北海道へ出立する二〇〇九年九月十九日、携帯電話の電波がうまく拾えない首都高のトンネルの中で、不意に、ああ、誰かと一緒に行けたらよかったのに。そう思った時、君はもう、羽田空港のロビーで僕を待ちわびていた。一人の冴えたさみしさと、北海道の大気が、何十年かぶりの友達を呼び寄せた。

また、この雑多な東京に帰ってきて、僕がいくら呼んでも、君はいない。ダメなんだ、心のそこからさみしい、君しかいない、って願わなければ。今の僕は、願う力すら弱っている。

前を見てごらん、ほら、小さなステージ。一緒に北海道で聞いたあの人、ギターを弾いて歌

うよ。旅の途中、かえりみち、君が好きだと言ってくれた歌の数々。

ねえ、中野さん、中野さん、どうして隣にいないんだ。僕の隣の席が空いているよ。その席のチケットは僕の鞆の中だ。君の席なんだよ、中野さん。中野さん、中野さん、君の声が聞こえない。君の気配が感じられない。君はどこに行ったの。

ライブが終わって、僕はふらふらと歩きだした。外苑前から神宮方向へ。ライブから受けた大きな熱を持って余している。新宿のなじみの店で飲んで帰ろう、だって、僕は一人だから。

携帯電話を見るとバッテリーの残量がほとんどなかった。それでも病的なまでの習慣として、インターネットに繋げて『電池切れるなう』と打ち込んだところで、バッテリーは綺麗になくなり、僕は、時刻すらわからなくなった。

いつだって携帯片手に歩いている。時刻を見る、計算をする、電車の乗り換えを調べる、誰かとやり取りをする、空白を埋める。この小さな月額六千円の機械がありとあらゆる余白を奪っていく。素晴らしい装置だ。

青い車用の案内標識を見つめながら、真っ直ぐに通りを進む。合っているはず、だ。だけど確認する術がない。奥まった公園では、帽子を斜に被った男の子たちがジャツジャツと、威嚇的な音を立ててスケートボードに興じている。酔った学生の一団が歩道一杯に広がって歩いている。言葉をよく聞けば、どこの国のものともつかない。

駅までの道のりが恐ろしいほどに長い。時間はどれほど経っているんだ。開いている店なんて一軒もない。早く駅へ駆け込みたい。そこには落ち着いた灯りと、時計とがある。

富良野の薄くらい国道を悠然と歩いた僕が、煌々と白熱灯の並んだ東京の国道を怯えながら行く。シャツの裾が破けているのを隠して歩いているような心許なさ。ふわふわする。

ようやく青山一丁目駅を見つけて潜り込む。白い灯り、白い壁。地下鉄の生ぬるい風と香り。乗り込んだ地下鉄が動き出して、やっと息を吐き出せた。

息を吸って、吐いて、三駅過ぎて新宿駅。深い位置にある大江戸線、南口方向へ回る。粛々と歩を進める。エスカレーターに乗る。みんな不安を希釈するように携帯電話を眺めている。僕もポケットを探って黒い端末を取り出して、電源が切れていることを確認して、また仕舞う。

一人を持って余している。誰のためでもないつづやきが出来ないつまらない不安。白い踊り場が少しずつ見えてくる。

そこに。

揺れる黒髪が見えた。人ごみの中からいち早く僕を見つけ出して、そっと小さく手を振っている。僕も、小さく振りかえす。

プロトコルが確立された。今、目の前に、シャツワンピースを着た、彼女が立っている。今、ここにいる。ここにいる。

エスカレータが終わったなー、と、ほっとしたと思ったら、それはただの踊り場で、また一本エスカレータが待ってるって、ひどいトラップだと思うんだよ。エスカレータって、ただでさえ、不安な感じがするだろ。

「終わりが見えない、すごく長いエスカレータのほうがこわいです」

ああ、都営新宿線とか、地獄へ降りていくのかと思うくらい長いね。

新しい地下鉄ができればできるほど、深いところに線路を作らなくちゃいけない。エスカレータもその度長くなる。新宿あたりの地下ってどうなってるんだろう。誰か断面を見せてくれないかな。

踊り場の壁によりかかって、ぐるぐるとエスカレータを乗り換える人の流れを見ている。隣にいる彼女も、なんとはなしにその様子を見ている。直接見なくても、気配でわかる。

久しぶり。

「久しぶり……になるんでしょうか」

そうだよ、久しぶりだよ。どう、最近。

「そうですね……ああ、二年生になりました」

知ってる。

「知ってるんだったら聞かないでください」

そう、ふくれないでよ。今日ね、ライブだったよ。すごく良かった。

「……知ってます」

そうだよね。

途切れることのない、人。下から絶え間なく現れては、また上へ消えていく。実は、上に行った人はまた下りのエスカレータに乗っていて、なんども同じところをぐるぐる回っていたりして

。

中野さん、そろそろ下の名前を教えてよ。

「じゃあ、あなたのお名前も教えてください」

それは。

「答えられないでしょう」

答えてしまったら、何かが壊れてしまう気がする。

「そうです。世界の輪郭をはっきりさせてしまったら、私は、私たちは」

僕の知っている彼女は『世界の輪郭』なんて言葉使わない。ねえ、君は。

「中野、梓だろう？」

「あなたが、そう思うのなら」

そうだ、君の名前は、中野梓。桜ヶ丘高校の二年生。軽音部所属。担当楽器はサイドギター。友達は憂と純ちゃん。君は、画面の中にいる、紙の中にいる、ただの薄っぺらな萌え萌えのキャラクターに過ぎない。

知ってる、知ってる、知ってる!! あかが、僕の中にしかいなかったように。君も、また。

「ええ、私は、あなたが思う、中野梓です。でも、あなただって、名前がない。二十代の男性のふりをした」

「うん」

僕は、僕ではない。僕は、私、だ。

「そうだね.....中野さん、私は、僕」

「アニメに私はいます。コミックスに私はいます。でも、アニメに私はいません。コミックスに私はいません。私は、二〇〇九年九月に、僕と北海道を旅した、中野、です」

「そう、そう、だ、ね」

「私は、誰かが思った数だけ、そこにいます。いつだって、その人のそばにいます」

強い強い願いの数だけ現れる、無数の中野さんたち。中野さんだけじゃない、あらゆる媒体、あらゆる思いから派生して生まれる、「彼女と僕」の影絵。

「私たちが忘れることはありません。忘れられさえしなければ、いつだって」

そうだ。彼女たちを薄れさせるのは、僕らの責だ。次々に現れる、新しい女の子はいつだってみんな可愛い。僕だって、中野さんの前は、誰に思いを寄せていた？

目の前を行く人の流れに、二重写しのように、もうひとつの人の群れが重なっていた。色とりどりの少女たち。スモッグを着たゆのっち、ひきこもりになってしまった滯、セーラー服に赤い眼鏡のミク、己にそっくりな子供を抱いて笑う大河、よく見ると首輪をつけているみのり、かがみと恥ずかしそうに手をつないで去るこなた、ケーキの箱を抱えているヒロさん、快活な綾並、空に帰らなかった観鈴……。

みんな、誰かの見た夢だ。無限に連なる二次元と三次元の万華鏡。僕たちは、けして、悲しい夢なんか見ない。

僕が人の流れの中に、一歩踏み出すと、彼女たちの姿は消えた。きっと、誰かの世界の中に帰ったのだろう。僕は、僕だけの少女に別れの手を振る。

「中野さん、また、会おうね」

呼んでくれれば、いつだって。

けして耳には聞こえぬ、声が応えた。

中野さんと僕

<http://p.booklog.jp/book/38724>

初出：ふんどしくわえたやまいぬ <http://d.hatena.ne.jp/futon5656/>

このテキストは同人誌版「中野さんと僕」に一部修正を加えたものです。

著者：広川伊砂緒

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hazeinheart/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38724>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38724>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.